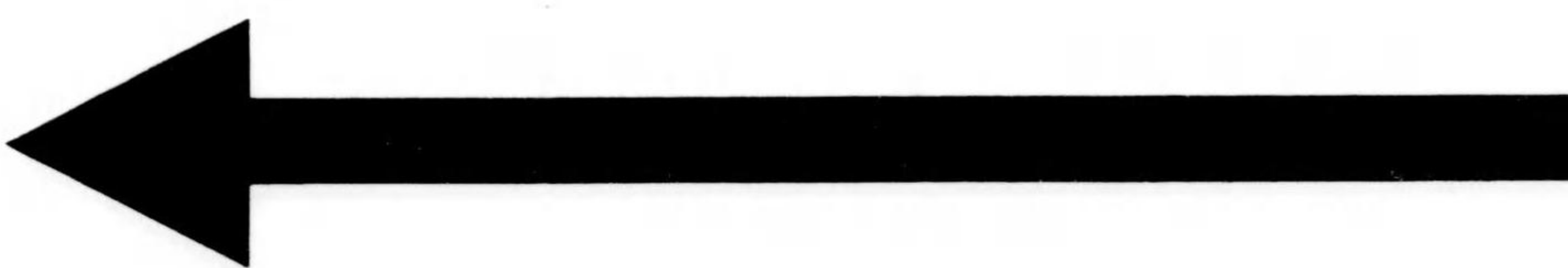
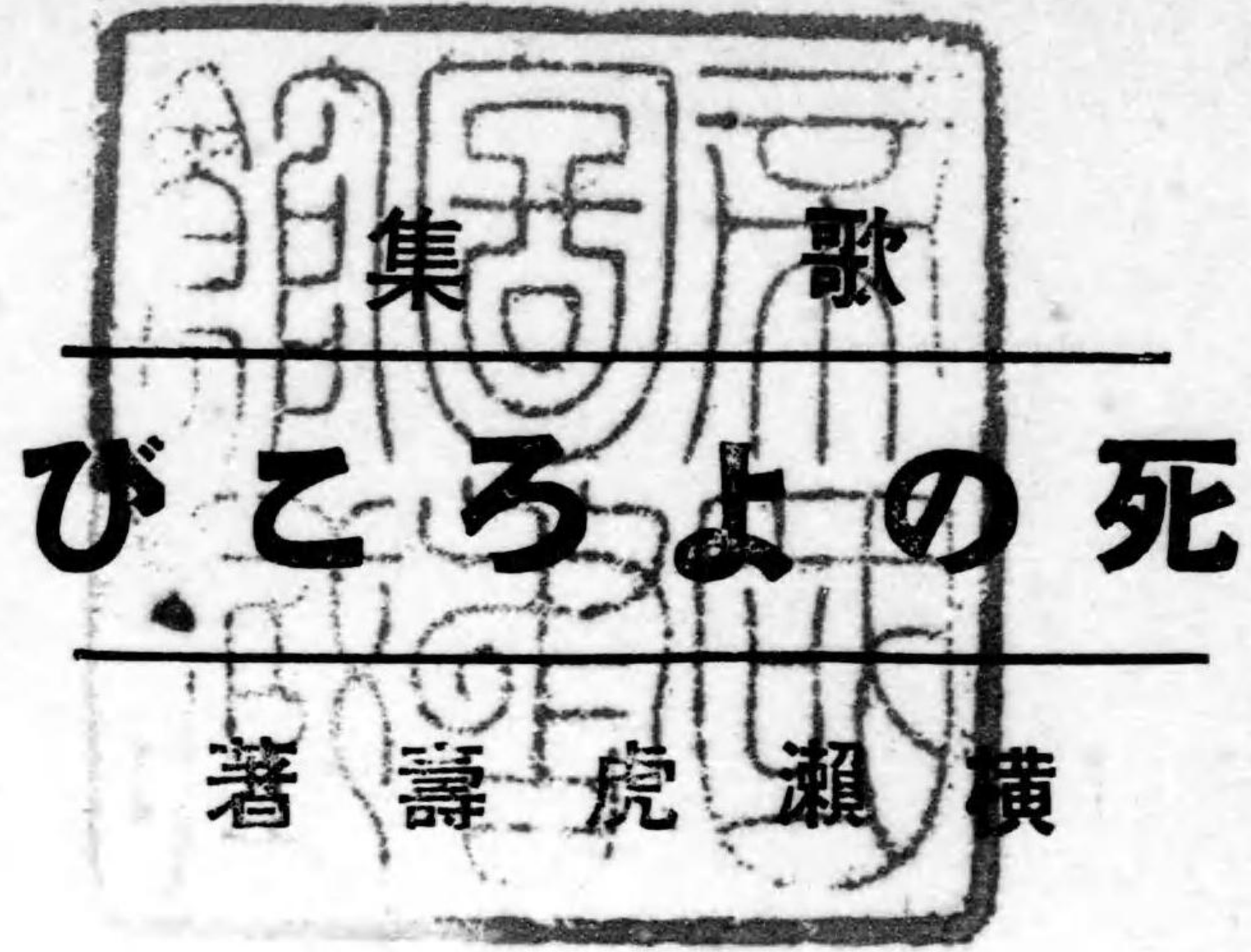


始





特100
89



石 蒜 社 板
M CM X V

初版五百部内ノ 117 號

大正
4. 12. 1.
内交

たゞ死こそは神の名譽なれ

——ホドレエル「賢者の死」——



死のよろこび日

母名悼蛇彼岸花

髪

とくり蜂

濁體の歌

一金屏の乳

二羊のごとく

三翡翠

月暈

母

I

忍にんじゆう従の三十年は過ぎけらしうら切
り人に母をかぞふる

II

母を見れば心ぞ和なごむ老の目に死な
じとわれをはげますからに

天が紅虹べにと流るる夕ぐれはわが死
ぬ時と人にこたへむ

IV

燕^か菁^{せう}虹は海の嵐の兆^{めが}てふわが死よ
來れ天つみ空ゆ

v

大方の人は背きぬ^{つか}攔むべき毛の
すぢもわれはもたらず

VI

われにしては死のよろこびとなら
めども勝江[×]が髪^マの焼く^マに悲しき

×勝江は従妹
なり。慶興に
て死す。

VII

寂しさは十人の戀を見つれごも紛^{まぎ}
れぬものか涙の流る

VIII

少女等の立つる誓ひは笹の葉の黒くろ
鴟じの小水しとに値あたひせむかも

龍燈鬼鬼の挑かぐる灯をだにも點せ
や暗きわれの小床をに

×龍燈鬼は岡
寺にあり。高
さ三尺。鬼の
角にて捧げた
る燈籠。

X

一人在る日一人在る夜を見守れば
ゑゑしや鬼の点火怠る

XI

夢の終り戀の終りとなり
にけりう
とましかくて猶も
生くるか

わが涙血となりて落ちむあまりに
も賊そこなはれてし心なるゆゑ

少女等はわれより長き指もてり曲ま
ぐれば撓しなひ吸へば血滲み

XIV

日暮るれば開く蝙蝠の眼の如く海
に吸はるる我心哉

一人だに泣かば足りなむわが母の
愛あひことだに泣かば命足りなむ

母しあればかかる身ながら今日な
がら死なぬ命となほや思はむ

名

漢服文あやはとりといふ名を十年秘めて今こ
そ命つくれ人の初子うひに

えらばれしこれの名親は若草の妻
だに無きをいかゞ悲しぶ

無宿者あふ天のが下もには妻も無し夢に見
し子の生れ出でむや

われ子生まばつけむと思ひし日の本
の一のよき名を人にくれけり

悼

若草の妻もえ覓まかず死にければ寂
しとぞ思ふ久く白じの男も

秋し來れば紫苑の花のけふるをも
知らめや君は根の下にあり

蛇

蛇よわが痿えたる足を噛めかしと
招げごよらず女ならねば

毒だみの花を壇うたかに築き上げて祭れ
ば甦いくる蛇なりけらし

妹等いもらがり今宵忍ぶらむえ男の足し
喰はめやと蛇を捨てけり

XXVI

毒蛇よわが床に爬へ汝を見る夢の
うちだに戀を忘れむ

彼岸花

曼珠沙華秋は枯れにけり爛れたる
われの心も癒えむとすらむ

XXVIII

馬骨燃えて燐の飛びけるがさ藪や
野篠の中に咲ける曼珠沙華

心灼ヤく日となれりけり曼珠沙華ニギ苦
き球マもが睡求めむ

XXX

曼珠沙華花は火を噴く球ながら苦
きを喰まば眠來らむ

XXXI

苦ねろころに人を思へば曼珠沙華秋は心に
焼きつく花か

XXXII

暫くは逢はじと告ぐる人の目に曼
珠沙華咲かば悲しからまし

XXXIII

一瓣は君の一瓣はわれの彼岸花心
爛ただらす花は彼岸花

髮

しんじゆしませうか髪きりましよか
髪は生へもの身はだいじ

XXXIV

盗人よ錢を與へむ今宵いんで宮城
少女を取りて歸り來

XXXV

夢朝朝髪を忘れぬ悲しさに先行方
無き櫛を探るか

XXXVI

嫁がざる女も無きをとりわきて君
に流れし涙のをしく

XXXVII

人戀の涙教へし君なればうづめが
母のわれに泣くらむ

XXXVIII

荒陵と心はなりぬ君を思ふ涙は土
にうづめてしもの

117/117

大紫の巻末の
...

XXXIX

君のみは常^と久^はのをこめに生くらむ
とかつて思ひき今も思へど

XI.

撓たがつかば櫛を吾手にとらしめて梳
かむといひき今も言ふやも

平打をささしめむ日も亡びけり髪
切りし日は君の去りし日

緒おければ愛をしこだにあらずしかす
かに涙にしめす髪のおぶらよ

XLIII

箱枕いまだなれねばピンおちてわ
らはめくらむ曉の髪

XLIV

紫の打紐ながら纏きつれば髪は丸
がれぬ夢に泣きけむ

君が髪見れば母さへ泣くものをかみ鬘
に賣らむ酒に代へてむ

母よりも君をば愛しと思ひつる戀
の猛者なれば命生きけれ

天地に侶ともなきわれの悲かなみもかつは
思はむ戀こひざめの人

XLVIII

彼の女等清く終れとわれにいふを
忘れしも無し嫁がぬも無し

XLIX

空^う洞^らめく心ながらにわが待つは君
が嫁ぎを知らせくること

し

たとへ汝王の后と徴めさるとも跪く
べきわれと思ふや

LI

磯館浪のうねりの近き夜は静に眠
れ明日は眼さめむ

とくり蜂

蜂の子になれなれ青の尺とりは蜂
の巢のみはよう取りもせぬ

尺蠖しゃくとりは蜂の申し子木の子こなす土の
徳利に蜂と睡れり

尺蠖の木のてしと蜂とるの
申し子木の子なす土の
徳利に蜂と睡れり

尺蠖よ這ひ出でて空の青を見よ土
の徳利に蜂とあらむより

LV

尺蠖はおぞの蟲哉蜂の子の劔守り
て蜂と眠れり

LVI

徳利蜂われに言へらく尺とりはわ
がほこ刺すをよこと思へり

蜀
體
の
歌

一金扉の乳

生れしは京の白河京の水産湯に汲
みて肌の匂へる

三十一

捨てらると知らで開けけむみごり
子のまづ見しものは母の目なるを

地もぐりの蹠^{かかと}むとか夢みけむわ
れを捨てたる母の苦しみ

LX

白河の在ざいにやはられしあつけ兒は
べこ呼ぶちいが聲になれしか

母無し子の母戀しとにあらねども
金扉かなどの乳を泣きて吸ひけり

LXII

最上川最上がくしの霧はれて船行
くなべにいろは倉見ゆ

母の目をはかる聴きこさは預け兒の小
さき胸にも有あちてしものを

LXIV

憎まれて十年すぎければ京訛忘れ
て出羽の少女となりし

火もえづる柘榴せきりゅうの子こを吹き打たむ
母の閉たてたる鐵くろがねの戸かどに

LXVI

不圖見しは山かがしめく蛇の目と
夜の鏡に影ひく帯と

懐かしや廊下の壁に泣いじやくり
指もて書きし梵字羅馬字

二羊のユウク

LXVIII

あばかれて足蹴せられし戸の白き
を見ずや君の戀なり

LXIX

針を刺す痛みによりし君が名もわ
が心よりはなれ行く今

けびる使のをさも知らじな血にて
捺しし君が指紋しもんの美あやしき文あや

見おこしし痛き瞳よ君が目は茨の
ごとくわが目にとほる

瑠璃越るりこに今宵の人を見むものか水
の中なる花にもあらぬに

LXXIII

柔かう伏せる眉かななでつれば睫
毛うるみて火をまぶしがる

LXXIV

雪ちらちら乳あらはなる懐に羊の
如くいねむ夜もあれ

LXXV

ふところの石の調體を取らしむと
衿をゆるむるきぬのきしめき

LXXVI

鬮體ぞと今はいへごもなほ生くる
君が面わの花と匂ふも

LXXVII

解くは七重袴の下のしづり帯紐き
を耻ちてうつむきし人

LXXVIII

おなじ腕おなじ唇ゆるしけむ君を
ぞ思ふ涙おつれど

LXXIX

君が書ける戯曲の終り知らしむと
われに取らせししのごころか

LXXX

一人生き一人死ぬるを
あはれみて
鬮おもてに示す戀の假面おもてか

LXXXI

枕へに劍を置かむか足のへに香を
炷たかむか夢のあやふき

LXX XII

火食鳥二夜さながら火をくひて
髑の上におくとみしかな

LXXXIII

ある時は君とありける水の上の鵠くぐり
の羽の白き夢とも

LXXXIV

わが歌も終つひの命となり
にけり 罰つひ骸
よ酒をいで吞ませんぞ

LXXXV

憎きものに思ひなしぬる君なれど
海に入れとは念おもはざりしを